

平成十七年一月三十日

平成十七年度 第一回『福田恆存を読む会』

発表者：吉野櫻雲

テーマ：《此処が解りにくい福田恆存》

恆存評論のあるものについては、以下「表」のやうな分類で比較し捉へると理解し易いのではと思ひ、此処にて展開してみます。(表中○×は分類内での伸張の適否を示す。なほ構図的比較は別図参照)

尚、前々回『職業としての作家』の「職業：権力欲」、そして前回『人間不在の防衛論議』の「問題は、すべてはフィクションであり云々」の、今一つ不明確な点等も、その視点で明確化が可能ではなからうかと。

即ち、それらは福田恆存の本質に繋がりうると思しき点（「近代自我：個人主義の限界」とそれを超えるべき「完成せる統一体としての人格」論）に、集約されていく問題点と考へられるのであります。

更に、今回主要項目の《解りにくい点》：「日本は物質面における近代化は行はれたが、物質面に対しての、精神の面での『精神の政治学』としての近代化は行はれてゐない」も、矢張りそこ（同一の視点）に辿り着いて行くのではなからうか。結局は「近代自我：個人主義の限界」と、超近代として「完成せる統一体としての人格」論への問題にと・・・。

その様に思へるが故に、以下「表及び図」で構図的に比較すると、難解テーマの輪郭が浮かび上がるのではなからうかと構成を試みました。

《此処が解りにくい：職業権力欲の成長。個人的自我の平静と純粹。とは・・・》

《以下、論考に際しての分類及び略号化は別紙『福田恆存を読む会』（仮）テキスト参照》

右：時代的 分類 ~~~~~ 下：《此処 が解りに くい》	封建制度時代 (前近代)  「図：テキスト P2」	甲図：西欧個人主義 (近代自我)の構図  「甲図：テキスト P8」	乙図：日本の精神 主義構図（非近 代）・・・「相對主 義の泥沼」  「乙図：テキスト P9」	「完成せる統一体 としての人格」論 ：恆存は「超近代」 の仮説（フィクシ ョン）として提示 したのでは。
職業：権力 欲の成長 とは・・・ 「支配・被	○  「封建的な支配 関係の秩序は職 業的身分の確立 により、上から	×  権力欲の有機的成 長の喪失＝権力欲 の自己集中化・・・ 行き場を失つた権	×  権力欲 A の B 化 「弱者の歪曲さ れた権力意思」	○  「完成せる統一体 としての人格」的 構図において、左 記「集团的秩序の

<p>支配の自己」の有機的流れの事では。</p> <p>個人的自我の平静と純粋とが保たれるとは。</p> <p>「近代作家」の危険とは。</p> <p>『職業としての作家』（P547）より。</p> <p>別紙：《此处が解りにくい：付記文》参照</p>	<p>下への権力の流れに沿って集団的自我を解放してみた。この秩序に安心しててもたれかかつてみたため、個人的自我はその上に純粋な成長をなしえた」P547</p> <p>~~~~~</p> <p>別紙《付記文》参照</p>	<p>力欲 A は、個人主義の特徴である自己の手で「おのれを完成（自己完成：C “）せしめんとする個人的自我（B）」の名目を借り、自己拡大化・自己全体化として歪曲され自己に集中する。</p> <p>近代作家（個人主義作家）もその類を免れない、と言ふ事。作家の領域（B）で獲得した名声も、個人主義ではそのメカニズムから来る閉塞は免れない・・・別紙《付記文》参照</p>	<p>確立してゐる時の職業」の問題は解決しうると。</p> <p>即ち、集団的自我の解放による力欲の有機的成長と、そして個人的自我もその上に純粋な成長をなしえらる。</p> <p>「背後にある道德」がその構図を支へ得る。</p> <p>追記するならば、「自己を何処かに隠さねばならぬ」の謂ひは、構図を支へる全体（C：道德＝天・神・仏）へ隠すの意である。⇒以下：《此处が解りにくい：付記文》参照</p>
--	---	---	--

#### 《此处が解りにくい：付記文》

封建制度時代（前近代）：集団的秩序の確立してゐる時の職業（『職業としての作家』より）

「封建的な支配関係の秩序は職業的身分の確立により、上から下への権力の流れに沿って集団的自我を解放してみた。この秩序に安心しててもたれかかつてみたため、個人的自我はその上に純粋な成長をなしえた」P547。

・・・とは、

集団的自我上における職業にて、「上から下への権力の流れに沿って」、その場から要求される「関係を形ある『物』にして見せる」といふ仕事（宿命/自己劇化）を行ふ事によって、封建的な支配関係の「背後にある道德：C」（注）に、個人的自我は繋がる事が出来

得るといふ事なのである。そこに個人的自我の目的である「自己完成」は道德（C）にと繋ぐ事が果たし得る。「純粋な成長」とはその事をいつてゐるのである。（別図参照）（注：「背後にある道德」は『自己劇化と告白』から：P417）

さうした「集团的秩序の確立してゐるところに職業はいささかの動揺も感じない」。即ち江戸時代なら、「封建的な支配関係の秩序」的構図が集团的自我上で、上昇形式のよつて上に伸びていき、しかもそれが儒教道德（C）へ繋がっていると言ふ安定感・安心感があり得たと言ふ事。別な言ひ方をすると、儒教道德の「天（C）」から集团的自我上への宿命（天意：関係）的権力の流れに対して自己劇化・演戲が出来たと言ふ事。（別図参照）

そのやうに、「職業とは集团的自我の生きんとする通路であるが、より重要なことは、この通路が充分に開かれてゐることによつて個人的自我の平静と純粋とが保たれるといふ事実なのである」

とは何を意味するか・・・重要項目。

即ち封建制度時代（前近代）では、職業を通して自己完成の通路（個人的自我）も開かれたと言ふ事を示す。

職業上における権力欲の「自己劇化」が、構図的終着点としての「背後にある全体（C：天・神等）」に繋がり得る安定感がある事によつて、個人的自我も「自己完成」の共演が権力欲の「自己劇化」の内に図れると言ふ事を示してゐる。個人主義においては、さうした「自己を何処かに隠す」隠し場所がない、と言ふ事である。何故ならば目的到達点は「自己」であるから。

そして大事な点は、甲構図（西欧個人主義《近代自我》構図）でも乙構図（日本精神主義構図）でも、自己完成の通路（個人的自我の通路）は閉ざされ、そこでは「権力欲」も歪曲される、と言ふ事だ。西欧個人主義《近代自我》は以下のメカニズムのジレンマから脱出し得ない。

近代＝「神（C）の死」即ち「神意（宿命：D1）喪失」⇒神の代はりに自己の手による宿命（D1）演出⇒自己主張（表現）・自由意思（人間如何に生くべき）D2⇒自己完成（C'：自己主人公化・自己全体化・自惚鏡）⇒自己陶醉・自己満足・自己絶対視・自己証明による「似非（D3）実在感」⇒自己喪失（自己への距離感喪失・適応異常）

（別図参照）

作家でも然り。文学（個人的自我）專業における「名声による権力欲の満足」でさへ、それが「個人主義文学」の範疇である限り、個人主義のメカニズムから来る閉塞は免れず、その「芸術」は個人的自我上における「権力欲の満足」で終はる。文学と言ふ芸術で名声を博しながら、個人主義は目的が「自己完成」であるが故に、個人主義の目的「自己完成」の名を隠れ蓑にしての「自己集中化・自己全体化」と言ふジレンマの陥穽に陥らざるを得ない。作家も個人主義文学を標榜する限り、文学と言ふ個人的自我上に安定を求めても、自己完成の通路（個人的自我）は開かれ得ない、と言ふ事だ。「近代作家の危険」とはそれを指すのでは。

・・・以上についての質疑応答

\*\*\*\*\*

《此処が解りにくい：国家愛（愛国心）と防衛とは》

右：時代的 分類 ~~~~~ 下：《此処 が解りに くい》	封建制度 時代（前 近代） 「図：テ キスト P2」	甲図：西欧個 人主義（近代 自我）の構図 「甲図：テキ スト P8」	乙図：日本の精神主 義構図（非近代）・・・ 「相対主義の泥沼」 「乙図：テキスト P9」	「完成せる統一体としての 人格」論 ：恆存は「超近代」の仮説 （フィクション）として提 示したのでは。
<p>国家愛（愛 国心）・・・ 日本は「こ のままで は最大の 軍備をし ても国は 守れない」 とは。 「問題は 国家意識、 国家観、詰 り国家と 個人との 関係と言 ふ人間存 在の根源 に繋がる もの」。</p> <p>『防衛論 の進め方 について の疑問』よ り</p>	<p>○ 国防・国 家愛も主 君を通して「背後 にある道 徳」に繋 がつてゐ た。（例： 江戸時代）</p>	<p>○ 【西欧】：神の棲 む国或は「神 に型どれる 人間の概念 の探求」とし て、自由と民 主主義を護 持せんする 事の証明が、 文中の「アメ リカの青年 には自国を 守る意思と 情熱がある」 と言ふ事に 繋がる。</p>	<p>× 日本は「このままで は最大の軍備をして も国は守れない」・・・以下の理由 （「相対主義の泥沼」 から来る欺瞞と偽 善）等で。 ＊敗戦アレルギーも 含め「愛国心」と言 ふ概念への適応異 常。 ＊「背後にある道徳」 或は「絶対」不在の 日本では、個人主義 がエゴイズム化する が如く、民主主義は 一国平和主義化（国 家エゴイズム集中） と変質する。 ＊「時間待ち改憲論」 「必要の前に法律の 解釈は無限に自由」 と言ふ日本の欺瞞と 偽善・・・国民の、 法と政治に対する信 頼感の喪失を招く。</p>	<p>○ 左記の今日的混迷からの脱 出口として以下の文及び別 紙の「完成せる統一体とし ての人格」論へと繋がる。</p> <p>『父親』の人格の中には国 民としての仮面（役・自己劇 化：吉野注）と親としての仮 面と二つがあり、一人でその 二役を演じ分けてゐるだけ の事である。そして、その仮 面の使ひ分けを一つの完成 した統一体として為し得る ものが人格なのである・・・」 そしてフィクションを統一 せしむるものとして、矢張り 全体（C）或は前項目の同文 が此処にも適用されるので ある。</p> <p>即ち、「背後にある道徳：C」 がその構図を支へ得ると。 そして「自己を越えたるもの の何か」として、「自己を何 処か（絶対・全体 C）に隠さ ねばならぬ」と言ふのであ る。「絶対・全体」がないか</p>

			さうした欺瞞と偽善の日本国憲法（平和憲法）への強要適応は、国民にコンシャンス（良心・自覚）への求心力を失はせ、終には人格崩壊、精神の退廃を招かしめる。と恆存は言ふ。	ら二役を演ずることが出来ないのであると。詳細は以下、：《此处が解りにくい：付記文》「完成せる統一体としての人格」論へ続けて説明。（別図参照）
--	--	--	--	--

### 《「完成せる統一体としての人格」論：付記文》

（国防問題は「国家意識、国家観、詰り国家と個人との関係と言ふ人間存在の根源に繋がるもの」。そしてそれに適応する為の「完成せる統一体としての人格」論）

（全集6：覚書の「仮説（フィクション）論」より）

「一般の日本人は、自分の子供が戦場に駆り立てられ、殺されるのが嫌だからと言つて、戦争に反対し、軍隊に反発し、徴兵制度を否定する。が、これは『母親』の感情である。その点は『父親』でも同じであらう、が、『父親』は論理の筋道を立てる。国家（場面：吉野注）といふフィクションを成り立たせるためには、子供が戦場に駆り立てられるのも止むを得ないと考へ、そのための制度もまたフィクションとして認める。が、彼にも感情がある。自分の子供だけは徴兵されないように小細工するかも知れぬ。私はそれもまた可と考へる。『父親』の人格の中には国民としての仮面（役・自己劇化：吉野注）と親としての仮面と二つがあり、一人でその二役を演じ分けてゐるだけの事である。そして、その仮面の使ひ分けを一つの完成した統一体として為し得るものが人格なのである。『私たちはしつかりしてゐない』という自覚が、『私たち』をしつかりさせてくれる別次元のフィクションとしての国家や防衛を要請するのである、要するに人格も法も国家も、すべてはフィクションなのであり、迫持（せりもち）、控へ壁などの備へによつて、その崩壊を防ぎ、努めてその維持を工夫しなければならぬものなのである」（P 703 全6「覚書」）（別図：参照）

「問題は、すべてはフィクションであり、それを協力して造上げるのに一役買つてゐる国民の一人、公務員の一人、家族の一人といふ何役かを操る自分の中の集团的自己をひとつの堅固なフィクションとしての統一体たらしめる原動力は何かといふ事である。それは純粹な個人的自己であり、それがもし過去の歴史と大自然の生命力（時間的全体・空間的全体・C：吉野注）に繋つてゐなければ、人格は崩壊する。現代の人間に最も欠けているものはその明確な意識ではないか」（P 704 全6「覚書」）：（別図1：参照）

此处過去の歴史と大自然の生命力（時間的全体・空間的全体）に繋つてゐなければ、人

**格は崩壊する。**が最重要な項目である。

上記のフィクションを統一せしめるものとして、矢張り全体（C）即ち、過去の歴史と大  
自然の生命力（時間的・空間的全体：吉野注）や「背後にある道德：C」がその構図を支へ  
得る「原動力」なのである、と恆存は言つてゐるのである。

故に「自己を何処か（絶対・全体 C）に隠さねばならぬ」と言ふ文が持ち出されるのだ。  
さうした統一すべき「絶対・全体」或は主題がないから二役を演ずることが出来ないのだ。  
ある。二役のみならず何役かを操る「自己劇化」が出来得る人格として、「完成せる統一  
体としての人格」論が登場するのである。

何役かを操る「自己劇化」を、恆存の別な表現で言へばかうなる。各場面で関係的眞実  
を生かしていくのだ。それが「完成せる統一体としての人格」なのだと。ではそれはどう言  
ふ事かと言へば、

何役かを操る各場面でそこから発生する「（関係の）眞実を生かすために一つのお面をか  
ぶる（役を演ずる・自己劇化：吉野注）」「演戲なしには人生は成り立たない。つまり仮説  
なしには成り立たない」「眞実といふのは、ひとつの関係の中にある。個々の実体よりはそ  
の関係の方が先に存在している。人生といふものは、関係が眞実なんで、一生涯自分のお  
かれた関係の中でもつて動いてゐる。いろいろな関係を処理していき、それらの集積され  
た関係がその人の生涯といふもの。それを私は演戲だといふ」「われわれがこしらへたもの  
は、相対的であつて絶対ではないといふ原理をちゃんと心得て、こいつを絶対化（仮説の  
完璧化・築城の完璧化：吉野注）しようといふ努力」。これは又「結婚生活も演戲し通す（結  
婚といふ仮説、関係の完璧化：吉野注）」といふ男女間の問題の同一性にもつながる。《単  
「生き甲斐といふ事」対談「反近代につひて」（P 195・199）

・・・以上についての質疑応答

そして上記文に関連する事柄として恆存はかく言ふ。「事実であり、実在」と仮説すると。  
鷗外の「かのやうに」と「仮説」との違い・・・

「私の言ふ『仮説』はそれ（鷗外）とは違ふ。『神が事実でない。義務が事実でない』と  
は私は言はない。神（C）は、義務（D1）は、国家（C'）は、神話（C）は、歴史（C）は、  
家族（C'）は、そしてその他等々の『仮説』（D1・C'）は全て事実であり、実在なのであ  
り、『これはどうしても今日になつて認めずにはゐられない』のである。かうして鷗外と私  
とは虚実が入れ代る。恐らく明治と大正の差であらう」（全六覚書 P703）

以上についての質疑応答

\*\*\*\*\*

《此処が解りにくい：『精神の政治学』としての近代化は行はれてゐないとは》

次の項目に進む前に、結論を先に言つてしまえば、「乙図」の日本の現状を「甲図」でも

なく、かといって「前近代」に戻すのではなく、「完成せる統一体としての人格」論へと赴かせるのが日本人の精神の近代化であると、恆存は言つてゐるのではなからうか。

右:時代的 分類 ~~~~~ 下:《此处 が解りに くい》	前近代 (封建制 度時代を含む)	甲図:西欧個人主義 (近代自我)の構図	乙図:日本の精神 主義構図 (非近 代)・・・「相对主 義の泥沼」	「完成せる統一体 としての人格」論 :恆存は「超近代」 の仮説 (フィクシ ョン) として提示 したのでは。↓
《近代化 の問題》  「日本は 物質面 における近 代化は行 はれたが、 物質面 に対しての、 精神の面 での『精神 の政治学』 としての 近代化は 行はれて ゐない」と は。 ⇒「乙図: 日本の精 神主義構 図 (非近 代)」へ続 く。  詳細は以 下:《此处	×  自然や社会の問 題は、「精神の領 域 (B 個人の純 粋性: 吉野注) に属し精神がこ れを解決すべき だと信じてゐ た」時代⇨右 (近 代) との違い。 自然科学・社会 科学 (実証精神) の未発達による 非客体化状態に あつた時代。 別図参照 (作成 要)	○  「科学技術と社会 制度の民主化との 過程が進むにした がつて、それまでの 精神の領域 (B 個人 の純粋性: 吉野注) に属し精神がこれ を解決すべきだと 信じてゐた問題が、 逐次物質の領域 (A 「支配=被支配の 自己」: 同注) に移 されて、物質の問題 として解決されて いつた。物欲に克と いふ克己の倫理 (B の領域) も、充分に 欲望する物質生産 (A の領域) すると いふことで解決さ れてしまふし、病苦 に堪へるといふ美 徳 (B の領域) も、 医学の進歩 (A の領 域) が徐々にそのや うな精神の無益な	×  《此处が解りに くい》・・・とは、 「精神の政治学」 のラインが下ま で下がってない と言ふ事では。乙 構図上に留まっ ただけでの物質 面での近代化。で あるから、それを 「完成せる統一 体としての人格」 構図に迄、「下げ て」尚かつ持つて 行け、と言ふ事。 甲構図的にし、し かも「個人主義・ 近代自我」ではな くと言ふところ だ。  『精神の政治学』 としての近代化 =「完成せる統一 体としての人格」 と言ふ事。	○  「近代化がいけ ないのではない、そ れに対処し得る精 神の近代化に人々 が殆ど心を用ゐな い事がいけないの である」の「近代 化に対処し得る精 神の近代化」  (P399) と言ふ言 葉そのものが、「完 成せる統一体とし ての人格」論の必 要を指してゐるの である。・・・どの やうに⇒詳細は 以下:《此处が解り にくい: 付記文》 へ。

が解りに くい:付記 文》へ。		負担を軽減しつつある」(全二『近代の宿命』: P453) 甲 図参照		
-----------------------	--	---------------------------------------	--	--

《此処が解りにくい:『精神の政治学』・・・:付記文》

《解りにくい点》以下( )は吉野挿入

(参考文として):《精神の政治学とはA・Bの分割線》

「精神の政治学とは個人の純粹性(B)と「支配=被支配の自己」(A)とのあひだに、それぞれの個性に応じた均衡を企てるものであるゆえに、もし社会(A)が自然のごとき合理性をもつてゐるならば、もはや政治学(AB分割線)の用はなく科学がそれに代るべきである」⇒Bの不要化。(全2:P451『近代の宿命』)・・・とは。⇒図にて説明「甲図:【西欧十九世紀構図】」

《解りにくい点》:

「日本は物質面における近代化は行はれたが、物質面に対しての、精神の面での『精神の政治学』としての近代化は行はれてゐない」。

更に録音を再現すると、「(日本は近代化を)物質面においてだけやつた。その物質面で行われた近代化に対する、適応能力としての、『精神の政治学』としての近代化。これはまだ行われてゐない」「(講演カセット「日本の近代化とその自立より」)

・・・とは、上記で言ふ「精神の政治学」の分割線が下まで下がつてないと言ふ事では(甲・乙図参照)。物質面における近代化は行はれたとは「乙構図:日本の精神主義構図(非近代)」のままでの物質面(A上のみ)での近代化であつたと言ふ事。⇒「甲図」から創出された近代西欧製品を、「乙図」状態のままで先進国化と言ふ模倣(輸入)をした事によつて生じた適応異常。「科学製品は輸入できても科学精神は移植できなかつた」(『近代日本文学の系譜』)とはその事を指す。西欧近代の各種概念や観念(言葉)の「自己所有化」ができなかつたのである。

その歪んだ日本の近代化(適応異常)を修正する手段として、「精神の政治学」分割線の最下降を示唆するのである。そしてその手段として「処世術(A)的概念)」で解決できるものは「処世術」で、と恆存は説くのである。「カエサルのはカエサルで」と同じ謂ひである。

日本は物質面のみの模倣(客体化)で済まして、精神(個人的自我:B)から、そこ潜在する「カエサル(A)」的部分を搾り出して、集团的自我(A)に押し出して行くと言ふ西欧的能動がなかつた。故に「精神の政治学」ラインが下降しなかつた、と言ふ事に繋がるのでは。



それは何故か・・・「科学製品・科学精神＝近代（甲図構造）」を創出するには、それを生み出すその歴史が。そしてそれを日本は見逃した。洋才の奥に洋魂（キリスト教）があるのを。即ち「精神の政治学」分割線の「最下降」は模倣で出来るものではなかつた、と言ふ事である。

参考：歴史の意識（西欧）・・・「絶対者のないところに歴史はありえない」のである。

クリスト教の絶対神による「統一性と一貫性との意識が人間の生活に歴史を付与」した。⇒そしてその神（絶対者）そのものが「近代を過去のアンチテーゼとして成立せしめる歴史的一貫性」を形作つた。即ち西欧は「反逆すべき神」として中世を持つことが出来たのである。⇒「なぜなら神と言ふ統一原理はその反逆において効力を失うものではなく、それどころか反逆者の群れと型とを統一しさへする」⇒近代西欧精神を「神に型どれる人間の概念の探求」と言ふ形で統一していつたのである。（参照：『近代の宿命』P462、及び同発表文中「西欧歴史的統一性：図解」及び『現代人の救ひといふこと』）

この点は重要：以上についての質疑応答

であるから我々日本人は、「精神の政治学」ラインを、下降位置としては「完成せる統一体としての人格」構図（注；「甲図」と同ライン）に迄下げて行け、と言ふ事。即ち「甲図【西欧十九世紀構図】」的にし、しかも「個人主義・近代自我」ではなくと言ふ事を示す。適応正常の理想が「完成せる統一体としての人格」論と言ふ事であらう。

そして、そのラインを下降させるには、更に関連的事柄として、  
「場を構成しながら、或は場によつて自己を変貌させながら、しかも一貫した人格を保ち続ける為には、場と自己とを冷静に眺め得る目を持たなければならない。或は現実の場と自己とを超えた何処かに自己を隠し預ける場所を持たなければならない」（P399）・・・とは将に「完成せる統一体としての人格」の構図そのものを指してみると受け取ることができるのである。図にての説明要：質疑応答

・・・そしてさらに続く。

「近代化といふ事がラショナルライゼイション（合理化）、メカナイゼイション（機械化）を志向する以上、社会は程度の差こそあれガラス張りになり、自己の隠し場所は容易に見付からなくなるであらう。近代化がいけないのではない、それに対処し得る精神の近代化に、人々が殆ど心を用ゐない事がいけないのである」

・・・とは何を意味するか。

「自己の隠し場所は容易に見付からなくなるであらう」とは、合理化等の実証精神によつて社会・自然は客体化・相対化（ガラス張り化）され、「個人的自我⇒全体」の「純粋な成長」が希薄化或は喪失化されるといふ事を言つてゐるのではなからうか。

近代化とはガラス張りになることであり、「自己が開放されて仕へるべきもの（C：全体・絶対）を喪つて自我が不安にさらされる」と言ふ事でもある。ガラス張りによつて、職業は「貸借清算の場」と化し、国防問題は「現象に対する戦術方法論」と化してしまふ。い

づれにおいても「個人的自我⇒全体 C」の絆は断たれ、国防においては「全体 C」から帰納する処の「国家意識、詰り国家（C'）」と個人との関係と言ふ人間存在の根源に繋がるもの」としての国防、と言ふ本質の問題が喪失されると、恆存は言つてゐるのである。そして肉体も性もその類を免れず、科学・社会学（心理学）でガラス張りにされ、DH ロレンスが言ふが如く、本来肉体が持つ「C：コスモス＝有機的宇宙」との黙契を失ひ、ただの科学（医学）的実証に晒され「消毒薬臭い」代物となつてしまった。と言ふ指摘もその内に入ると思ふのである。

「それに対処し得る精神の近代化」とは、我々日本人は人格を統一するところの質的別次元の「全体」を所持して、「完成せる統一体としての人格」のフィクション（仮説）を構築すること。と恆存は言つてゐるのだと思ふのである。（別図参照）

もう一つの《解かりにくい点》以下（ ）は吉野挿入

「自分と言葉との距離が測定出来ぬ人間は近代人ではない。いや人間ではない」  
 ・ ・ とは。

右：時代的 分類 ~~~~~ 下：《此处 が解りに くい》	前近代（封 建 制 度 時 代を含む） 「図：テキ スト P2」	甲図：西欧個 人主義（近代 自我）の構図 「甲図：テキ スト P8」	乙図：日本の精 神主義構図（非 近代）・・・「相 対主義の泥沼」 「乙図：テキス ト P9」	「完成せる統一体としての人 格」論「図：テキスト P10」 ：この論を恆存は「超近代」の 仮説（フィクション）として提 示したのでは。↓
「言葉の 自己所有 化」とは。  場との距 離（関係） の的確な 測定＝ 適応正常。 「図：テキ スト P12」	○ 儒教道德 の集团的 秩序にお ける客 体化。  「背後に ある道德 に繋がつ てゐた。	× 自己全体化 （自己絶対 視）による自 己喪失＝自 己への適応 異常＝自己 と言ふ場と の距離（関 係）の不的確 なる測定。	× 「それが身につく土壌が日本に欠けてゐる」即ち「何にでもべたべた引つづく自他未分の神道的生活態度」（『日本および日本人』）と言ふ日本の土壌が、 「言葉との距離測定」の能力を日本人から奪つてゐる。	○ 矢張りここでも、フィクションを統一する全体（C）の保持。として同じフレーズが適用されると思ふ。 ~~~~~ 場（C 及び C'）との「関係を形ある『物』にして見せる」事・・・何役かを操る自分の中の集团的自己をひとつの堅固なフィクションとしての統一体たらしめる原動力は何かといふ事である。 それは純粋な個人的自己であり、それがもし過去の歴史と大自然の生命力（時間的・空間的全体：吉野注）に繋つてゐなけ

				れば、人格は崩壊する」
--	--	--	--	-------------

「自分と言葉との距離が測定出来ぬ人間は近代人ではない・・・」：付記文》

吉野注：言葉との距離が測定出来ぬ、即ち言葉（F）に呑み込まれてゐる（E：距離至近）とは場（C”）に呑み込まれてゐる、或は居着いてゐる（沈湎）事を意味する。観念の奴隷、鸚鵡返しは人間にあらず、と言ふ事であらうか。（日本の言葉狩り（差別用語取締り）は如何？）〔参照：小生 HP 上『4 演劇論と人生論の一致「役者修業は人間修業」の2』〕

《出典》：評論『醒めて踊れ』（全集七：P393）

「近代化の必要条件は技術や社会制度など、所謂『ハードウェア』のメカナイゼイション（機械化）、システムライゼイション（組織化）、コンフォーマライゼイション（画一化）、ラショナライゼイション（合理化）等々の所謂近代化に対処する精神の政治学の確立、即ち所謂『ソフトウェア』の適応能力に在る。（中略）それに対応する方法は言葉や概念に囚われず、逆にこれを利用すること、即ち言葉の用法にすべてが懸つてゐる。自分と言葉との距離が測定出来ぬ人間は近代人ではない。いや人間ではない」 P393

・・・とは。

これも、日本の「物質面で行われた近代化に対する、適応能力としての、『精神の政治学』としての近代化。これはまだ行われてゐない」の問題と関連する。

即ち「甲図：P8」から創出された近代西欧製品を、「乙図：P9」状態のままで先進国化と言ふ模倣（輸入）をした事によつて生じた適応異常。なのであるから、その適応正常化の為に「精神の政治学」ラインを最下降させるには、上述の「処世術」に加へて、言葉の「自己所有化（So called）＝言葉との距離の測定」が必要と言ふ事であらう。特に「外来語・新漢語」に対して言葉との距離を適切に測定する事が適応正常化には必要とされるのである。

即ち、以下の文に繋がる。

「言葉（F）と話し手との間に距離（E）を保ち、その距離を絶え間なく変化させねばならぬのと同様に、相手と共に造り上げた場と自分との間（D1）にも距離を保たねばならず、その距離を絶えず変化させ得る能力がなければいけない。さういふ能力こそ、精神の政治学としての近代化といふものなのである」（『醒めて踊れ』）と。「なぜなら関係と称する実在物は潜在的には一つのせりふ（問答・対話・独白）によつて表し得るものだから」。であるから、「言葉との距離測定」によつて関係の適応正常化（真の近代化）が図れるのだと。（別図《言葉の自己所有化》参照）

だが、それが日本人には出来ない、と言ふ事が重要なのである。

それは何故か。・・・「言葉との距離測定」が出来ないのは、「それが身につく土壌が日本に欠けてゐるから」なのである、と恆存は言ふ。

「それが身につく土壌が日本に欠けてゐる」が故に、「物質面で行はれた近代化に対する、適応能力としての『精神の政治学』としての近代化」なんぞは当然、出来ないのは当たり前なのである。即ち「何にでもべたべた引つ付く自他未分の神道的生活態度」（『日本およ

び日本人』)と言ふ日本的土壤が、「言葉との距離測定」の能力を日本人から奪つてゐるのであり、為に「精神の近代化」自体を妨げてゐるのである。「乙構図」状況で事足りりとして、「精神の政治学」ラインを「甲構図」に迄下げようとせず、その構図のまま「何にでもべたべた引つ付き」、ただの物質的(A)模倣が出来た事を、それが和魂洋才で「近代化」そのものが成就したと早飲み込みした。「日本的土壤」＝「距離測定能力欠如」の致命的欠陥が其処に露出してゐるのに、その事に気がつかなかつたのである。気がついてゐたのは鷗外・漱石と言ふことか。

「さう言ふ土壤(乙構図)に生じた文学や芸術や学問が、或は政治や制度が、もし近代化に見えたとすれば、それは何処かにごまかしがあるに違ひ無い」と恆存は言ふのである。此処に欺瞞を嗅ぎ取る恆存の批評眼に凄さを小生は感じるのだが・・・。

当に尤もである。この特質をもつと解り易く図説すれば、明治になつて「甲構図：西欧十九世紀近代」に「乙構図」のまま日本は引つ付いたのである。「甲構図」に開いた物質面の近代化の花だけを「乙構図」に接ぎ木して同じ花(近代化)と称して、しかし全体像を見ればどう見ても彼我の差があるのを、それが見えなかつたと言へる。「近代化のごまかし」と言ふ自分の姿が、その「乙構図」の中に居るが為見えなかつたのではなからうか。かうして図で視覚化すればそれが「近代的に見える」筈がないのが解るのでは。(評論家「中西輝政」等はさういふ明治の「和魂洋才」を賞賛してゐる。西尾幹二もその講演会にゐた。が、『恆存論』(雑誌「諸君」)では恆存の「和魂洋才」批判に同意である。「これらの差異は何か。注：下欄にて再考察」)

と言つても、まだ解しにくいものがある。それをもう少し噛み砕くとかうなる。

#### 《各例題に対する適応異常と適応正常化》

以下：例	言葉との距離測定能力の欠如による模倣・・・「適応異常」。 場への沈湎	《適切測定：適応正常化》 ＝言葉の自己所有化。 So called「」的把握。	実人生で出来てゐない事は芝居でも出来ない。(P398) 出来ないのは、「それが身につく土壤が日本に欠けてゐるから」。
近代化	先進国崇拜(西欧崇拜)	機械化、組織化、合理化等々の「」的把握＝近代化を「歴史の必然」「必要悪」的に把握。 実証主義の陥穽を認知し。	「」的把握。言葉の自己所有化の図参照。 即ち、 <div>↓の文が重要。全てはこの文に集約される。</div>
資本主義	利潤(金儲け)の最高方法論	「資本主義を発展せしめた社会的主体は宗教改革の神」と言ふ把握。 別図【西欧歴史の一貫性】から出	「相手に掛かつてゐるせりふ(言葉)一つ一つに鉤を付け、その

		現したものと見る。	都度、それを自分（自国）の心に引掛けながら言ふ（何処の部分かに引掛けながら）」↓
民主主義 自由・平等 ・平和	絶対価値的把握	相対価値的把握＝「神に型どれる人間の概念の探求」の一つ。（ベターなる代物）	「所謂と言ふ語を用みなくとも、そのつもりで意へば、その言葉と話し手との間の距離は大になる」同上
パソコン	近代化の最先端・文明の利器と言ふ絶対価値的把握。	健康障害性も持つもの、としての「」的把握。	同上
芝居(台詞として)の例：「ああ腹が減った、ビフテキが食ひたい」	「ビフテキが食ひたい」と言ふ短距離的表現。	同じビフテキを思ひ描きながらも、食ひ過ぎて胃痛を起こした過去がトラウマとして想起された場合「言ひ方」が変る。距離が長化。「ビ・フ・テ・キが・・・」	右項は「」的把握をしての表現（フレイジング）が役者に要求される（参考：P398 下）
「ああ明治だ」	「文明開化だ」和魂洋才が可能と言ふ「短距離的」把握。 福沢諭吉的捉え方。	「ぶ・ん・め・い・か・い・か・だ」と言ふ漱石・鴎外の「」的把握（「精神の政治学」所持的把握）。	右項の方が前項目ともに「意識度が高く」なり長距離化。

\* 恆存原文を味はふ（P390 下～391 下：P398 上～9 上全部）。「講演カセットを聴く」

追記するならば、「近代化」なら、近代と言ふ言葉に呑み込まれず、メカナイゼイション（機械化）、ラショナルイゼイション（合理化）等々の言葉を So called（所謂：「・・・」）で捉へ、さうすることによつて「場と自己とを冷静に眺め得る目を持つこと」。即ち西欧（近代）と日本との距離を明確に捉へる事。別な言葉で言へば、必要悪として近代化につきあふと言ふ事では。

《以下、講演カセット『日本の近代化とその自立』より》

「実人生に近い芸術形式が芝居。日本は近代化がうまくいつてゐるやうに見えるが、実

際は（精神の近代化が）うまくいつてないのが芝居で解る」。即ち舞台に出る「非フレイジング演戯」＝実人生・現実の「非 So called 生活」。上記で言ふ「言葉の距離測定欠如」を物語つてゐるのだと。（例：「役者の日本人の『意』が『姿』を裏切る」云々。『醒めて踊れ』P399）

「日本の近代化の難しさ（即ち言葉の自己所有化＝場との適応正常の難しさ）が芝居の世界で解る」「芝居の中の適応異常＝実人生における適応異常の証拠立て」と恆存は言ふ。それは場との関係を「形ある『物』として見せる」即ち「距離測定」の行為が芝居で出来てゐないならば、実人生でもそれは出来てゐない、と言ふ事なのである。（別図《言葉の自己所有化》参照）

「あらゆる分野の中で芸術が一番近代化が遅れてゐる。演劇でそれが実現出来れば日本の文化は安心。日本は精神の近代化が出来た事になる」。と福田恆存は述べてゐる。

《言葉との距離（E）の至大化＝関係（D1）の至大化、即ち適応正常化》  
場から発生する「心の動き（関係）を形ある『物』として見せるのがせりふ（言葉）の力学」であるならば、逆に言葉と自己（自国）との距離を至大化して自己所有化して見せる事が、場との関係を至大化し的確に把握する事（適応正常化する事＝精神の近代化）に繋がるのである。

場（C “：場面）  ~~~~~ 以下は、《場的例》 *相手と日本 *相手と自己	⇒場から齎される D 1：関係・宿命・ 役割・心の動き（芝 居の場合）	場との距離（関係）測定 能力欠如＝言葉との距 離測定能力欠如・・・適 応異常。 即ち「関係を（適切に捉 えて言葉で）形ある『物』 として見せる」能力欠 如。とは ⇒「何にでも べたべた引つづく自他 未分の神道的生活態度」 と言ふ日本人的欠点。	《修正・改善》＝言 葉の自己所有化。 「関係と称する実在 物は潜在的には一つ のせりふ（言葉）に よつて表し得るもの だから」「場との関係 と言ふ実在物を潜在 物であるせりふ（言 葉）を使ひ、そのし やべり方・フレイジ ング・So called で 形化（距離至大化） して見せる」と言ふ ことに他ならない。
1. 西欧（先進国）	近代化（先進国 化・西欧化）	沈湎＝至近 *物質面のみの近代化	「」的把握。言葉 の自己所有化（E 操

		(和魂洋才) *So called「」的把握 の欠如。精神の近代化欠 如	作によるD 1 距離把 握)。【西欧十九世紀 構図】から出現した ものと見る事。
2. 「国家と自己」 と言ふ場	⇒愛国心・文化	「防衛・保守」精神の欠 如＝日本は「このままで は最大の軍備をしても 国は守れない」	
3. 「子と父」と言 ふ場	⇒父性（関係・役 割）	「」的把握の欠如とし ての「溺愛」＝適応異常 （距離至近）	愛情：So called とし ての「育成・躾」の 把握
4. (演劇)： 芝居相手と自己と 言ふ場（場面）	⇒心の動き	台詞に鉤を付けて自分 の心に引掛けながら喋 ると言ふ「関係を（適切 に捉えて）形ある『物』 として見せる」能力欠如 ＝フレイジング欠如	「」的把握。言葉 の自己所有化・・・ フレイジング
<p>上記「1～4」の各場面毎、「言葉との適切な距離測定」を計る事によつての、関係的眞実を生かす（適応正常化）と言ふ行為が、最終的帰結として「完成せる統一体としての人格」図の構成を示してゐるのである。それを可能にさせるべく「しつかりさせてくれる」ものとして「全体＝過去の歴史・大自然の生命力」が大きく存在の意義を持つのである。</p> <p>再度要約するならば、「精神の政治学」ラインを西欧近代の様に最下降させ、しかもその上げた集团的自我上に「完成せる統一体としての人格」構図を打ち建てる事。それが取りも直さず日本人の精神の近代化・「日本型個人主義」なのである、と恆存は言ふのである。</p> <p>上記の如き「自己劇化」の「後の空間に一つの建造物がまざまざと見えてこなければならぬ」と。</p>			

・・・とは、解るやうで矢張り難しい。以上についての質疑応答

\*\*\*\*\*

#### 最後に福田恆存と西尾幹二の対立点についての一考察

(以下：□は西尾幹二の文。「インターネット日録」より)

一例をあげれば、私は「平等」に対する考え方が先生と違っている。日本の国民の強さは太平楽めいた民衆の平等意識にあると私は思っている。先生は階級意識を欠くから日本人はダメだというような意味のことをよくユーモアをこめて語っていたが、イギリス社会をモデルにして日本を見ているように思えて、私には理解しがたかった。

外からどんどん新しい文明を入れ、古い自分を捨てていく日本人の一見軽薄なあり方に、福田先生はいつも懐疑的だったが、私はそこに日本人のバイタリティを発見し、期待していた。私は経済繁栄を目指した日本の選択を肯定さえしていた。先生とはたぶんこの点が決定的に違っていた。

（此处に西尾幹二の福田恆存への理解不足があるやうに思ふ。即ち、日本の「物質面で行われた近代化に対する、適応能力としての、『精神の政治学』としての近代化。これはまだ行われてゐない」と恆存の言ふ、その意味が解つてゐないのではなからうか。即ち「乙甲図」のままで「甲構図」の物質面の模倣でしかなかつた、と言ふ事が。

参考：中西輝政著『国民の文明史』での「和魂洋才」評価・・・「日本文明の本質をつかんだもの。明治の精神はこうして生まれた。これで持って明治の日本の成功物語はここでも早くから約束されていた」

恆存の「和魂洋才」観。・・・「福沢諭吉以下の明治洋学者達を、私は評価しえない。彼等の多くは、「和魂」も何もあつたものではない。所詮は地方階級武士の劣等感に基づいた立身出世主義が国家有用の実学といふ考へと結びついたのに過ぎまい」（『論争のすすめ』）

西尾幹二の論・・・「まったくその通りであります。私も、福沢諭吉という人への魅力を感じません」（雑誌『諸君』の恆存論から）

小生の疑問・・・たしか『国民の文明史』講演会の時、他の出席者も含めて西尾氏も、「和魂洋才」評価を皆でしてゐた様な記憶がするが。そして日本の「キリスト教（洋魂）」非移植（咀嚼不良？）の賞賛も。と言ふ事は彼等は恆存の言ふ「精神の近代化」の重要性を認めてゐないか、又は不明なのか、なのである（探求要の事項）。それだけ、この問題「精神の近代化」は日本人にとっては難解な事なのであらう。「三島由紀夫」の自刃についても、恆存が愛惜を籠めて「三島は自己の近代化が図れなかつたから死んだのだ」と、そのやうな内容で「現代学生文化会議」講演会で語つてゐたのを聞いた記憶がある。

古い文明を大事に保守するヨーロッパと、新しい文明を矢継早に取り入れる日本との比較で、先生は大体前者に軍配を上げ、日本の西洋にとうてい及ばぬ所以を説かれたが、私はヨーロッパの古い文明にある種の硬直を感じ、しかも日本の方がヨーロッパよりある意味で古く、ヨーロッパに新しさと底の浅さがあることも少しづつ意識するようになった。

をはり